有島武郎研究

―「詩への逸脱」をめぐって㈤―

宮野光男

本論は、「有島武郎の詩と詩論」論である「「詩への逸脱」をめぐって㈠～㈣」〔梅光女学院大学「日本文学研究」第十一号～十四号、昭50・11～53・11〕に関連するもので、有島のホイットマン論―独立したホイットマン論と、エッセイのなかでホイットマンにふれているもの―を、ほぼ執筆年代順にとりあげて分析し、その特色と、あわせて、有島の精神構造の解明を試みることを目的としたものである。

そして、本論は、「「詩への逸脱」をめぐって―㈣」にあわせて、有島武郎とホイットマンとの関係を、その著作集にエピグラフとして付されたホイットマン詩との関わりにおいて解明しようとしている一連の考察〔「「詩への逸脱」をめぐって㈡、㈢、以下続行予定〕のための序論にあたる部分でもあるが、いまは、発表の順序にしたがって、一応、㈤としておくことにする。

なお、紙幅の関係で、後半の二章、「ホキットマンに就いて」論、「ワルト・ホキットマン」論は、割愛した。

一

有島の初期のエッセイ「日記より」〔明41・6、12〕のなかで、有島は、自分の精神史に大きな足跡を残した人物を、

彫刻に於てはミケランジェロ、絵画に於てはジャン・フランソア・ミレー、詩に於てはワルト・ホキットマン、文章に於てはレオ・トルストイ、傾向に於てはヘンリック・イブセン、人に於てはわが祖母。〔三一〕

と列挙しているが、これが、有島のホイットマンとの繋がりを公にした最初のものである。

このエッセイは、有島の米国留学中、フランクフォード精神病院での看護夫生活、あるいはヨーロッパを歴遊し、帰国後札幌農学校へ赴任するまでの間の、前後四年間にわたる日記からの抜粋からなっているが、それらの記事が、発表当時〔明治四一年〕の心象を映し出すべく、日付けが省略され、補筆訂正されており、配列もかな

らずしも時間の経過通りにはなっていない、いわば日付けのない心象スケッチの体裁をとっている。

全部で三十三の章から成り立っているが、そのうちのいくつかの章は、現存する日記には該当する部分の見当らぬものであり、このホイットマンに関する叙述の部分も、そのなかのひとつである。おそらく、何らかの意味で公表されなかった部分の悔をとどめているものであろう。

もっとも、「日記より」とあるからといって、かならずしも、日記に忠実である必要はない。事実、該当する部分に見られる補筆訂正は、相当のもので、わずかの時間の経過のなかに、この時期の有島の心的変化の大きさを顕わにしているのである。

なかでも、

若し憐み得る広き心あるものあらば、暗にある反逆の人を憐めよ。〔二三〕

に象徴されている変化は、その特色のひとつを表わしているように思われるのである。

暗にある反逆の人を憐れめよ、我が神よ。〔明39・2・8〕

日記での、〈我が神よ〉という呼びかけが、〈広き心あるもの〉へと変化しているところに、〈自分以外の超自然的な力によって私が支配されてゐると感ずる事は自惚れにも出来なくなつて来た〉〔「リビングストン伝」第四版序」大8・3〕と神の存在を否定しながら、意識的には、否定している〈理外の理〉〔足助素一宛書簡、大7・7・14、叢文閣版全集第六巻所収〕の存在を、どうしても認めざるをえなかった有島の姿を見ることができるが、実は、このところに、キリスト教の神の、一種の匿名化を見ることができるように思われるのである。換言すれば、それは神の無色透明化でもある。

〈神は歩む可く他の道を与へ給ひぬ〉〔四〕とか、〈…彼処に大なる神の鎔爐あり〉〔六〕と、神の存在が、日記の叙述の通り話題になっている部分もある。有島の教会退会が明治四三年のことであったことを思えば、そのような混在は、むしろ、当然のことでもあるが、問題は、この時期に、すでに神がその姿を消しつつあったことと同時に、それが、唯物論への転換ではなく、超自然的存在に対しては、それを否定することのできなかった有島であることを顕わしていることなのである。

このような、超越的存在の原型ともいうべき〈一の力〉が、先に指摘した〈憐み得る広き心〉にかわるものとして述べられている第八章は、明治三十九年四月十八日の日記に該当する部分であるが、両者の間に見られる変化は、当時の有島の心的状況を察知することのできるひとつの手がかりなのである。

生と死とは、我知らず。されど我一個の事実あるを知る。我生を呪ひ、死を思ふ時、一の力わが衷にありて わが意志に抗するなり。其の力には暖かみありて濕ひあり、而して光あり。〔中略〕

其の力我に悲しましめ、痩せしめ、眠らしむ。然して此の力のみ我を活かしむ。

実に、我は其の力が弄ぶ傀儡なるに似たり。残忍なる其の力よ。〔八〕

この部分の原文は、左の通りである。

我は生命も死をも知らず。されど我は知る。ただ一つを。―そは我愛すべしの一事なり。我生命を呪ひ、死をば愛慕する時、尚何者か我が心の中に止まり、我が意志にさからひて、この生命をば続けしむるものあり。そは暖かみ、そは濕ひをもてり、又抗し得ぬ力をもてり。〔中略〕

嗚呼、我はそのものを知る。そは「愛」なり。〔中略〕

愛よ。汝は我を眠らしめず、我を痩せ衰へしむ。また汝は我を内気ならしめ、我を愚かならしむ。されど汝は、また汝のみが我をば生かしむるなり。

然り、我は「愛」に生き、「愛」に死なん。我ほかに術を知らず。そは我「愛」の王権の下なる奴隷に過ぎざればなり。

残酷なる暴王よ。〔原文英文、織田正信訳〕

有島は、後になって、この米国留学の、ちょうど中間の時期にあたる時を、〈今の基督教に対する私の疑惑は段々深まって行った〉〔「リビングストン伝」第四版序」〕時としているが、そうであればあるほど、〈暗にある反逆の人を憐れめよ、我が神よ〉と祈らざるをえなかったのである。この時の有島にとって、祈りの対象は明らかに神であった。つまり、〈愛〉は、神の別称だったのである。

〈我を創りしものこそ「愛」なり。―おゝ、何ものにても、何ものにても奪ひ去れ。我は誇る、されど汝の前には力なきなり、汝主よ、汝王よ、汝暴君よ〉〔日記、明39・4・18〕という表現には、鈴木鎮平氏の指摘にあるように、後に、〈神は与へる力ではない奪ふ力だ〉〔「惜しみなく愛は奪ふ」大6・6〕という発想に変化してゆく、ひとつの前提を見ることができるが、この場合、いかに否定的な表現であったとしても、〈矛盾せる調和〉〔日記、明39・4・18〕として、むしろ神の愛への信頼を、その背後に見ることもできるところなのであり、〈残酷なる暴王〉という表現も、その願いをこめた、一種の逆説的表現なのである。

しかし、「日記より」の文章には、もはや神の愛は語られていないのである。そして、いわば不可抗的支配力のみが残ったかたちでの〈一の力〉が、このエッセイの基調となっている否定的人間観と相まって、せまってくるのである。そうであればあるほど、元来は神の変形である〈憐み得る広き心〉でもある〈一の力〉への期待―〈暖かみありて濕ひあり、而して光あり〉という、かつて、有島が、神の実在感のうちに実感しえた〈慰藉する自然〉への期待のようなものが、より切実に表明されているのである。

このエッセイにおける自然観が、〈自然如何に狂ふとも、其の声には常に破る可からざる諧調あるものを〉〔一三〕と、その本質における調和性が強調され、〈自然が一笑へるなるか泣けるなるか―色と形と声とに於て、破る可からざる調和に入りし瞬時は、其の容

何物よりも美に、其の生何物よりも短し。〈〔七〕と、その顕現の時間の瞬時である情景のなかに、それが超越的存在であることを思わせ、その絶対性と超越性とが、〈つつましき深窓の乙女—彼女の被衣は深く、其の胸はかき合はされたり〉〔同前〕と、神秘的様相をおびた少女の姿として表現されているのも、そのひとつの顕われだということができよう。そして、この自然の人格化ともいうべき乙女像は、ホイットマンというかたちでの自然の人格化と、おそらく本質的には等質のものであるにちがいない。その幻想性の強調が、少女像として形象され、その現実性の強調が、ホイットマン像となっているのである。

＊

〈汝の知慧を信仰にまで鍛ひ上げよ〉〔五〕と、自らを鞭撻してはみても、このエッセイ全篇を覆っている否定的人間観は、〈…思へば同じき人生を享けて、人の履みたる跡をだに討ね難し〉〔三三〕という結章に表現されている呟きのように、有島を蚕食しつつあったように思われるのであるが、それとは、表裏一体のかたちで、換言すれば、望を託した自然を自然たらしめている存在、超越的な絶対的存在への期待が、端的に表わされているのが、このエッセイに付された、ホイットマン詩によるエピグラフなのである。

この瞬間、あこがれの、物思はしき、
よその土地にも他の人がゐて、あこがれて、物思はしげであるやうに私には思へる。

＊　＊　＊　＊

私達は兄弟であり愛人であるに相違ないのだ、
彼等と共にあるのは幸福であるに相違ないのだ。〔「この瞬間あこがれの物思はしき」有島訳、ただし、エピグラフとしては英文で掲げられている〕

有島が、自らの著作にホイットマン詩によるエピグラフを付すことの嚆矢ともいうべきものであるが、このようなかたちでの有島の、ホイットマン詩への共感の表明は、彼自身の作品のテーマ理解に、ひとつの示唆を与えているのである。

さて、この詩の本来の主題は、人類愛であろう。＊印の部分には、〈独逸にも、伊太利にも、仏蘭西にも、西班牙にも、見渡せばそれらの人を見付け出すことが出来るやうに思へる—或は更に、更に遠く、支那にも、露西亜にも、印度にも—異邦の言葉を語りながら／若し私がそれ等の人々を知ることが出来たなら自国の人に対してと同様に、その人々に思ひ寄るにちがひないと思へる〉〔有島訳〕という、ホイットマンの、一種のコスモポリタニズムとでもいうような、人間に対する熱い親愛の情が披瀝されているところが省略されているのであるが、そのことによって、有島の期待は、より抽象的に、普遍化されて、人間への愛の可能性への〈熱望〉として印象づけられるようになっているように思われるのである。

おそらく、この詩は、有島の、ホイットマンとの邂逅によってもたらされた、魂の出会いの可能性とその喜びを象徴しているのであろう。そして、この詩に表現されているホイットマンの、その人間

に対する愛―熱望―を支えているものへの憧憬が、有島の潜在的希望として顕わにされているように思われるのである。

このことは、「有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって㈣―」においてすでに述べたように、有島の、神秘主義的傾向、換言すれば超越的存在に対する憧憬の、ひとつの顕われなのである。それは、この時点においては、有島の精神史においてはまだ隠されている部分であるが、それへの照明を、ホイットマン詩によるエピグラフが可能にしているところだということができるのである。

つまり、日記に示されている神の愛への期待が消滅し、それが、ひとつの可能性として、エピグラフに、匿名化された神への期待というかたちで顕われていることを表わしているのであって、愛の内在化ということにもなる、有島の精神構造の特色を瞥見する可能性を、このところに見出すことができるのである。

二

米国留学中の体験のなかでも、重要な意味をもっているもののひとつであるホイットマンとの邂逅は、有島の帰国後、〈予科の学生にホイットマンの功績を紹介しよう〉〔日記、明41・3・11、原文英文〕という思いとなって顕現化した。そして、たとえば、その年の四月十日の日記に、〈各組に教授し、W・ウィットマンの生涯について語る〉〔同前〕と記されているように、すみやかに具現化したのである。そのことは、有島の内面における自己認識の、〈余は、自分自身の立つべき土台を自分で見出すまで休らふことは出来ない〉〔日記、同4・13、同前〕という状況にあった有島にとって、彼の強壮さは、余の心をひたすら驚かし、捕へる。あれほどに健康に、しかもあれほど詩的にあり得るものがあらうか。彼こそ確かに来るべき時代の喜ばしき黎明である。〔日記、明41・3・11〕

ということのできるホイットマンは、まさに、彼の孤独を癒やし、ひとつの指針を与えることのできる存在として、明確にその姿を顕わしてきた〈生きてゐる魂〉だったからにちがいない。いまや、有島にとって、ホイットマンは〈己が魂と相触るゝ魂〉〔日記、明41・3・12、原文英文〕となりつつあったのである。

そして、学生たちへの紹介、学生たちとの研究会[註2]、あるいは来札した武者小路実篤との語らい[註3]を通して、有島の内面に醸成されたホイットマン像を、かたちに現わしたものが、「ワルト・ホキットマンの一断面」〔大2・6〕と、「草の葉」〔「白樺」大2・7〕なのである。

＊

「ワルト・ホキットマンの一断面」が、有島のエッセイとしては初期のものであるということと、ホイットマン論としても最初のものであるという意味でも、その内容は注目に値するものである。その一ヶ月後に発表された「草の葉」に比して、内面化の度合や、各詩篇の鑑賞は、より概括的ではあるが、そこには、すでに、有島のホイットマン観の上限と下限とが明確に表わされているように思われるのであるが、なかでも、ホイットマン詩の引用にみられる自然観は、有島のホイットマン観の特色をよく表わしていると同時に、

その中に有島自身の精神史の特色を解明する、ひとつの手がかりを見出すことができるのである。

論中、十数篇のホイットマン詩が取り上げられているが、その引用のしかたは、詩題だけが羅列してあるものや、初行の引用、数行にわたる引用とさまざまであるが、それらに共通していることは、完全性、永遠性、不滅性をその本質とする自然と、同化合一を遂げているホイットマンの発見と、その讃美に満ちた部分だということである。ちょうど、有島の精神史上、最も大きな出来事のひとつであった定山溪での見神体験が、その自然観のうえに大きな変化として顕現化したように、ここで、ふたたび、自然が、単なる景物としてではなく、有島の心象風景を映し出す象徴表現として、ホイットマンに重ね合わされて取り出されているのである。

もち論、そのことは、詩集「草の葉」に対する有島の、総括的な認識でもあろうが、〈健全であれ不健全であれ、私の脈は地球の脈と同じ打ち方をし始めた事を知つて居る〉と、有島が、旧来の倫理観をもってすれば〈偽善者〉という否定的な烙印をおされてしまう存在であるにもかかわらず、その中に、真実の人間としての生き方を見出すことができるという確信が、自然の生命との合一、一体感によって生ぜしめられているところに、その特色を見ることができるのであるが、それが、さらに〈ホヰットマンになつて居た〉という実感でもあったこと、―〈衝動と慰藉〉をともなった―は、この時期の有島の、人間志向の具体的な目標がホイットマンによって明確にされていたことをも表わしているのである。

〔彼が南北戦争で、人と、人の事業と云ふものを知つたやうに、〕キャムデンの幽棲で自然と云ふものと黙会した。それは彼の詩の凡てが證明を与へて居る。彼は草の語るを聞き、木の歩むを見た。而して自然と人類と自己と云ふものを全く融合した。〔中略〕永世を暗示して、人の耳には餘りに高き歌を奏でながら、私等を囲む無際の自然それがホヰットマンその人だ。

という有島は、このところで「ポーマソクをあとにして」の一節〔第一二歌〕を引いている。〈個性を歌う詩人〉を志向し、一切のものが〈不完全なことなど少しもなく、未来にだってありえないこと〉〔原文英文、訳は岩波文庫版『草の葉』上によった〕を歌っているところを、である。

有島は、ホイットマンが、エマソンによって、〈simmer しつつあったものが、とうとう boil-over した〉のだ、という。それは、有島とホイットマン、あるいは、エマソンやカーライルとの関係にあてはめることのできる論理であろう。生来の〈自然癖〉〔両親宛書簡、明33・3・14〕は、カーライルに触れることによって、にわかに人称化された自然観へと変化したことについては、すでに述べたが、(註4) これらの引用を見るにつけても、それが、ホイットマンという存在として、人格化されたことを知ることができるのである。

私は彼の慰藉と鞭撻とを愛する。慰藉と鞭撻、そんな言葉は彼に適はない。彼の撫愛(Caress)と呪詛(Curse)。それを私は愛する。

と有島はいう。

かつては、自然そのもののなかに慰藉と鞭撻とを見た有島が、その極限としての人格化を、〈撫愛と呪詛〉を同時的に内包する存在であるホイットマン像として掲げているということは、ひとたび正統的な信仰の次元において〈慰藉〉の部分を見失った有島が、ふたたび顕わにした魂の故郷への郷愁を示しているのであろう。しかし、問題は、そのことを明らかにすると同時に、いわば包括的自然観ともいうべき、矛盾する二つの価値を同時的に存在せしめうる根拠を、どこに見出すことができるのか、ということなのである。

*

当時の有島の、ホイットマンとの関わりにおける自然観の、もうひとつの特色は、人格化された自然との等質性をホイットマンの人格の特性として讃美することだけではなく、いわゆる〈人間平等主義〉[註5]を意味する人間観を、その一範疇として捉えることができることである。それが、最も端的に表現されたものが、〈都市の自然〉である。

有島が「ブロードウエイ・ページェント」や「ブルックリン渡船場を横ぎりて」などを想起しながら述べている〈都市の自然〉とは、そこに住んでいる人間への関心に他ならない。それは、かつて、有島が、ニューヨークで実感した都市の魅力を、ホイットマンの詩のなかに見出しているところである。

大なる都市の喘ぎ苦しむ様は、人の心をして穏かならざらしむ。されども彼処に大なる渇仰あり、熱慕あり、聞け彼の大なる叫喚。憐む可き人の子の多くは唯耳を塞ぎて田園神聖主義を云々するに過ぎず、されども世には都会てふもの存せり。人彼処に住めり。〔中略〕Humamity の彼処にあるは田園と異る事なきなり。都会は大なる神の熔爐なり。金と鋸屑はまがふ方なく彼処にて吹き分けらるるなり。〔日記、明39・1・26〕

かつて、このように、都会を、人間を志向した有島は、ホイットマンのなかに、〈だがそれにも増して彼の心を捕へたものは都市の自然だった。〉と、その人間への関心を、激しい人間志向を、鋭敏に見出しているのである。

有島の都会志向は、人間に対する尽きざる関心の顕われである。それは、ついに自然を歌う自然詩人ではなく、徹頭徹尾人間を追究しつづける作家へと、有島を向かわしめたのである。[註6]

しかし、それが、完全な自然からの離反を意味しているかといえば、そうではない。ホイットマンの包括的自然観、換言すれば、〈時間的—空間的平等主義〉は、[註7]有島に、〈宇宙に起こるどんなことでもすべて完全な奇蹟であ〉る〔「ポーマノクをあとにして」〕ることを教えることによって、かつて否定した〈Christianity の楽天的な生活観〉〔日記、明39・1・11〕にとってかわる〈楽天的平等主義〉[註8]への傾斜を生ぜしめると同時に、やがて、人間の内面における自然—つまり自然の内在化であるが—へと、その眼を向けざるをえない者であることを忘れることはできないのである。

*

ところで、この時期の有島のホイットマン論には、もうひとつの

傾向を見ることができるのである。それは、ホイットマンによる救済願望である。

〈自分を歌った太陽のやうな大きい輝いた“walt whitman”〉なかで、とくに引用している部分が、自己の不滅性を謳歌したところであることは「「詩への逸脱」をめぐって(四)」においてすでに述べたが、その引用部分が、〈私はありのまゝに存在する—それで沢山だ〉という一種の自己充足を表明することで完結するためには、人間の不滅性を、健全性を、あるいは荘厳さを、完全に、まさに〈ありのまゝに〉認め、受容する存在がなければならないことに注目しなければならないのである。

この問題は、先にもふれた、包括的自然観を可能にする根拠を問う問題と、本質的には同じものであるが、その答えの可能性のひとつは、〈誰もが私に頓着しないからといって私は平気だ、又誰もが頓着するからといつて私は平気だ。／そんなものより遙かに大きな一つの世界が私に注目してゐる—それは私自身だ〉によく表わされている〈私自身〉〔「自己を歌ふ」〔二〇〕〕に見出されるのである。

ホイットマンにとって、この〈私自身〉は〈彼が「自己」と呼ぶものは、現実の彼自身と象徴的な彼とに二大別される〉(註9)、いわば大文字で書くべき〈私〉なのである。つまり、〈超自然といふことも驚くには足らない、私自身が最高者の一人たる時がやがて来る〉というホイットマンは、〈既に一個の創造者〉〔同前、〔四一〕〕なのである。

この私にして、はじめて、〈たとえあなたが誰であろうと〉、その存在を、ありのままに、全面的に、無条件に、無制限に受容することができるのである。有島が、後に、著作集のエピグラフに、「アダムの子供たち」の「天然に帰る瞬間よ」〔第二輯『カインの末裔』〕や、「名もない淫売婦に」〔第八・九輯『或る女』〕を採用しているのも、そのような私への期待の、ひとつの顕われであろうが、その傾向が、すでに、この、初期のホイットマン論に、ひとつの可能性として見られるということは興味深いことである。

〈Out of the rolling ocean, the crowd, came a drop gently to me. ／ Whispering, *I love you, befor long I die*...と云ふあの宝玉のやうな小歌〉といわれている詩は、有島が、そのすべてのホイットマン論においてとりあげている詩のひとつである「群衆—その海原のさかまく波間から」の冒頭の一節であるが、この詩は、宇宙であり、完全者であり、しかも人間である私の、愛するもの—〈一しづくの水〉への愛の歌である。

この詩は、有島の指摘にもある〔「ワルト・ホキットマン」〕ようにある女性に捧げられたもので、エレジーのひとつであるといわれている(註10)が、そのような事実を越えて、永遠の生命の象徴である海に息付く愛の完全さの讃歌であることに異論はない。そして、このところに、ホイットマンの、あの、ひとりの名もない娼婦への呼びかけに見られる愛のまなざしを見出すことができるのである。

安堵して海にお帰り、愛する者よ、
〔中略〕
あせらずにおいで—暫くの間—
毎日、日の沈む時、愛する者よ、私はあなたへの愛のため、

大空と、大海原と、大地とに親しみの挨拶を送つてゐるのだから。〔有島訳〕

この、やさしい愛の呼びかけは、あの〈眼の底には潤みありき、其唇には慄ひありき。其眉根には無限の恥色ありき。其頬には云ふ可からざる同情ありき〉〔日記、明36・2・8〕と表現されているキリストの面影を彷彿させるものなのであり、それは、ホイットマンにとっても一種の理想像であった完全受容者―救済者のイメージと重なりあってくるところのものなのである。

三

著作集第四輯に収録されたホイットマン論「草の葉（ホヰットマンに関する考察）」が、有島の内部生命論ともいうべき魂論であることについては、すでに「「詩への逸脱」をめぐって㈣」で述べたところであるが、このエッセイの未定稿である「白樺」掲載稿との間には、多少の変化が認められるので、有島のホイットマン観の変化として、一応ふれておきたいと思う。

＊

未定稿と定稿との間に見られる変化は、多くの場合、論旨の明確化と強調のための推敲の結果であるが、二、三の点については、たんなる文飾上の変化の範囲を越えた、いわば有島の内面の変化の顕現と見ることのできるもののように思われる。

まず第一に、定稿において魂の荘厳さを述べ、その〈過去と現在との総和であり、未来の凡てである〉という意味で絶対者の謂でもある〈神〉の尊号を与えうるものであることを説いた後に、その魂を本来的な意味で表現しうるものが〈暗示〉であるとしているところは、有島が、超越的存在を認めているところであり、その神秘主義的傾向が思いのほか根強いものであったことを思わせるところであることについては「「詩への逸脱」をめぐって㈣」において述べたところであるが、この部分が、未定稿にはないのである。

山田昭夫氏によって年譜の明治四十四年の項に紹介され、佐々木靖章氏によってその内容が報告された、「暗示」と題する有島の講演が、〈頗る哲学的な思想〉で、〈智識的にして解剖的なる研究といふもの以外に、寧ろ主情意的にして直覚的なる暗示といふもの〉却って甚だ大勢力を占めてゐること、其重要にして深き意義あることを〉(註12)述べたものであったと伝えられているが、この、〈暗示〉への着目と顕現には、有島の内面における超越的存在に対する潜在的願望が徐々に醸成されてゆく、ひとつの過程を知ることのできる変化として位置づけることのできるものなのである。

もうひとつの変化は、魂の永遠不滅性を強調するために、「大統領リンカーン追頌歌」のうちの第一六歌「死の歌」の全訳が付け加えられているところである。

〈晴れやかな光に照らされると、死も亦美しい一人の保護女神だ。死を讃美しよう。〉という有島の思いは、〈来い、可憐ななつかしい死よ、〉に始まる死の讃歌によって、みごとに表現されているのである。

有島にとって、「大統領リンカーン追頌歌」が、心ひかれるホイ

ットマン詩のひとつであったことは、「ワルト・ホキットマンの一断面」において、〈リンカーンの死を追慕して歌った死の讃歌〉として取り上げられていることからも明らかであるが、定稿において、「死の歌」の全訳が加えられたことの意味は大きいということができるのである。

ところで、定稿には、もうひとつ、ホイットマン詩が付け加えられているが、そのことによって、有島の魂論が、究極的には〈大なる魂〉との調和を志向していることを、より顕著に示しているように思われるのである。

魂の即位を避ける事は出来ない。それを避けざらんには、老いたるものは滅ぶる覚悟を、用なきものは廃たるゝ準備を、倨傲なるものはひれ伏す身構へをして居なければならぬ。頑迷と、姑息と、圧抑と、阿諛とは魂の防禦には最も鈍つた武器である。

〈「行け、大道は私達の前にある！／そこは安全だ—私は歩いて見たのだ—私のこの足が十分に試みたのだ。

〔中略〕

わが子よ！私はお前に手を与へる！／お前に金よりは少し貴い私の愛を与へる！／説教や法令の代りに私はお前に私自身を与へる！／お前もお前自身を私にくれないか、而して一緒に旅に出ないか。／生きてる限り、お互にしつかり結び付いていつたら如何だらう」“Song of the Open Road” 220—231〉

私の魂はかく私に告げる。而してワルト・ホキットマンは私の魂の告げる所にかく唱和する。〔以下略〕

つまり、〈私の魂はかく私に告げる〉の内容が、未定稿では〈魂の即位〉にかかわる内容であるのに対して、定稿では、もち論そのことをふまえたうえでのことではあるが、それを「大道の歌」のこの詩〔〈　〉内の詩〕によって、より明確に、その未来における可能性をも含めて指示しているのである。

これは、たんなる文脈を整えるためだけの付加ではない。とくに、詩の最後の二行に示された同行志向は、不可分にして同一ならざるもうひとつの魂の慫慂を感じさせるもののように思われるのである。このところに、自然の、人称化され、ホイットマンというかたちで人格化されたものの象徴としての〈草〉との交感のもたらす歓喜への期待が、ひとつの、積極的な意味をもつ世界が、より明らかになる可能性を見出すことができるのである。

＊　＊　＊

以上、主として、未定稿と定稿との間にみられる変化を中心に、そのなかに幽翳する、絶対的なものへの憧憬の可能性を述べてきたが、それは、「草の葉」論それ自体の、ひとつの特色であり、未定稿から定稿へという推移をたどることによって、より明確に、その意図を知ることができたということができるのである。

現在を度外視して私の落ち着き所が何処にあらう。あらゆる缺陥と矛盾と束縛とを以てして、茲に私の眼前にある現在の尊さよ。而して慕はしさよ。私はこの現在に更に何者を付け加へれば、こ

の完全さを更に完全にする事が出来るだらう。

このように云う有島からもわかるように、有島の完全への志向は顕著である。そして、〈生きとし生けるものゝ美しさ完全さよ！〉〔「時を思う」〕とうたうホイットマンに唱和して、自らの完全さを夢想するとき、永遠は、我が掌中にある、と錯覚することは容易である。が、問題は、その根拠をどこに見出すかということが、再び問われなくてはならないところなのである。

彼は過去でもない、現在でもない、又未来でもない。今も過去も未来もその外凡てのものも飽満の醍醐味を魂に齎らす力は有たない。唯それ自身のみが魂の真の伴侶である。"the soul of itself"である。

魂の絶対性について、有島はこのように云う。

すべての時間と空間とを越えて存在する魂、それは、永遠者の謂である。まさに、〈この後、時は延ぶることなし〉[註13]といわれている、神の時の到来を思うべき状況なのである。

このところにも、有島の、意識を越えて—潜在意識のなかに—絶対者の支配を求める姿を見出すことができるように思われるのである。〔未完〕

註1　「有島武郎論—ホイットマンを中心に—」〔「教育研究」第十一号　昭46・2〕

有島武郎研究　—「詩への逸脱」をめぐって(五)—

註2　長田幹彦『文豪の素顔』〔要書房刊、昭28・11〕

註3　明治四十四年五月、武者小路は再度訪札、この時有島と再会し、ホイットマン讃歌を作っている。

註4・6　「自然観にみられるキリスト教受容と定着の考察」〔拙著『有島武郎の文学』桜楓社刊、昭49・6〕

註5・8　亀井俊介「明治浪漫主義の成立とホイットマン」〔『近代文学におけるホイットマンとの運命』研究社刊、昭45・3〕

註7　夏目漱石「文壇に於ける平等主義の代表者『ウオルト・ホイットマン』Walt Whitman の詩について」〔明25・10〕

註9　清水春雄「自己のイメジ」〔『ホイットマンの心象研究』篠崎書林刊、昭43・11　訂正版〕

註10　鈴木保昭「若き日の有島武郎とホイットマンの詩」〔『白樺派の文学とホイットマン』東京精文館刊、昭52・7〕

註11　清水春雄「海のイメジ」〔註9に同じ。〕

註12　「有島武郎年譜」〔山田昭夫、内田満共編『近代文学資料・

有島武郎』下　桜楓社刊、昭50・6〕

佐々木靖章『資料有島武郎著作目録・著作解題　全集逸文周辺資料』〔萬葉堂出版刊、昭53・5。なお、講演内容については、同書に「文武会会報」（明45・4）の学芸部報告として紹介されているものの抜粋である。〕

註13　『新約聖書』「ヨハネ黙示録」第十章六節